日本風土記 一

ル 3
302
1

ワ1呂3
302
巻 1

日本風土記序

夫民之情、愛家必愛郷、
蓋是由彼結屋作田、
勤苦民俗於安居、
古歌云、
高山雲深谷

如使者和漢知識之易
凡物之屬變而之變變
而生出之而生情也 淮南
曰物之所生生生而
是深而繼生生之生生而
生者是都之生所以生生
而所使生來生也風土
記之器屬於形器周變而
生者生形者也 本形
清國古之生生之生風

土記に能登の国と信
存十二ヶ所七の橋や近き
場所を教ふる古風土記
書生島生島能登撫集
記以存書生冊僧の島の

梨素因之人清平作
夫玉地の自然なる面
底文の錦之彩別意相相
・是鹿島之雪将の琴之島
屋之根岸相経持之

重於屋の屋之彩安於
屋生の本面し大老風之
世の高尾羅漢堂
三体於屋之の観音堂
享和三癸亥八月彫

日本風土記引用書目

風土記　相摸風土記　太平記
出雲風土記　源氏物語　盛衰記
丹後風土記　同河海鈔　東鑑
摂津風土記　同花鳥餘情　大和名所記
土佐風土記　徒然草　辰市名所記
豐前風土記　宇治拾遺物語　伊勢名所記
肥前風土記　古今著聞集　鎌倉名所記
備後風土記　倭論語　伊勢物語

徹書記物語　西行撰集抄　改暦雜事記
王代一覽　元亨釋書　師時記
續本朝文粹　本朝逈史　園太暦
姓氏錄　沙石集　江次第
峰相記　拾芥鈔　類聚國史
改暦記　氏成私記　神代卷
陽復記　比成私記　同便覽
元元集　寛平御記　同圖
鳥居銘　太子馬腦　同系圖傳

游仙窟　慈惠大師記　同啓蒙
日本紀　先代舊事本記　神皇實錄
日本後紀　豐葦原記　同正統記
續日本紀　同卜定記　神祇拾遺
三代實錄　公事根元　神社考
續日本後紀　古語拾遺　神名帳
文德實錄　倭姫世記　神書抄
延喜式　鎮座本記　神名祕書
釋日本紀　兼邦記　神祇百首

舊事紀　兼俱迁宮記　神階記
古事紀　日吉鎮座記　神別記
神祇正宗　二十二社注　大和本記
神代參疏　同鎮座記　加茂社記
宮記　宇佐縁起　簾中鈔
春日記　職原鈔　諸神記
鴨長明道記　清輔奥義鈔　同袋草紙
古今和歌集　續千載集　風雅集
千載和歌集　新拾遺集　玉葉集

拾遺和歌集　續拾遺集　金葉集
後撰和歌集　續後拾遺集　詞華集
新勅撰集　新古今集　山家集
續古今集　年中行事歌合　壬二集
續後撰集　歌枕名寄　月清集
新後拾遺集　堀河百首　八雲御鈔

六十餘州風土記及民部省圖帳諸國受領勘文大小神社山川事跡等詳依舊紀補正之然事多文繁雖累歲月不能終編僅成書

爲小冊爾云

○日本異名　豐葦原浦安國
東姫氏國　殷馭盧嶋和人國
君子國　野馬臺文物國
秋津洲　秋津島水穂地
細戈千足國　日域扶桑敷島

人皇三十二代定五畿七道三十四代分六十六箇國

△五畿内五箇國　畿内とは帝都の邦畿ふしく
めぐり近きむとくとなり

日本風土記卷一

○山城國　八郡　田圃八千九百六十二丁

天孫勅して椎津を下りて導土となして本ノ天
下と治平し橿原に都し即天皇位しめ天一同食
坐ふく山代國の造とこれ山代直の祖なり山城大
和河内和泉摂津此五ケ國を畿内とこそ中ほど山城
ちいさく秀くぬる四ケ国の後ふある國なれど山背とそて
山しろと訓ける又云山城玉は日本の正中ふあるとく
高天原と像しなく霊地くの京都なる葛野郡愛宕の二郡

の地に在り鴨河をめぐり右に桂川を帯て南に二水
相合し小さき連山と屏を形揚天下に申さう桓武天皇
新京と建く鬼を定め邦を統く四海と授と真に天
地の中に有て百王不易の鴻基と成右京の南に一千
七百五十一丈東西一万五百八十丈累年の浪或い四緑に翠り
或い繁花を綴る波世天正十八年新に封疆を繁く東に
京極に沿り西い朱雀紙屋川に沿り西に九條に至り南に
朱雀に至る周廻九七万六百六十三丈に在を京師と号す
の右京の地多くは沼沢に大路の外に畑畝るものなり

五條口。三條口。今出川口一名大原口一名長坂口。丹波口。東寺口。是を京師の七口と云
敷馬口。蓮台野口
乙訓 葛野 愛宕 紀伊 宇治 久世
相楽 綴喜

上皆大上き國南北百余里

知行高	二十一万六千七十石	江戸より百九五里余
京	二條御城	城下 淀城

山城 一之宮 加茂大明神

○皇城禁裏法華殿宮殿壮麗さうゝ初延暦年中
京所中央に有
十二門を立正面と朱雀門南の左を義礼門右に
皇嘉門北を偉鑒門北の東を建智門西に安嘉門
東を待賢門東の南を郁芳門北を陽明門西を藻
壁門西の南に諸天門北を殷富門と云後北東
上西の二門を建る初く十四門後世に及て天正
十八年に漸六門を建て民力を省く今九門とする
殿上の内侍所紫宸殿清涼殿常御殿小御所
御涼所黒戸法勝殿春内殿長橋局殿上間宜陽

殿劍璽間渡廊掃形窓石灰壇荒海障子昆明
池障子萩戸上御局賢聖障子瀧口空板左近
櫻右近橘神嘉殿御厠間東西對屋等なり

名産

牛房 姫川 水菜 或壬生菜とも云 藍 九條赤ちの羽
壬生の條赤寺の出の為田の出る
蘇 乳 東寺の羽 胡蘿蔔 味ひもまさる 菜服
右四産淀虎村より多く出る味可し 金座銀座 両替町
冷泉町風の西ふ大宅
等る醫師の所あり 法馬 剪作後為れ 提秤
錦繡綾羅諸織物類 一条ふの方
西洞の町より後
いづる 深匿 西洞院の
上下ふあり 紅匿 油小路巳条
為ふ名 袈裟 名衣 三条室町
ふあり

弓箭 糸柾の糸のわくにあり 刀劍 紀州伊勢の刀或は二条堀川に有 釜鍋匠 三条釜座にあり 烏帽子 烏丸六角にあり 圖書 二条二条又は糸柾通堀川 面雛冠笛の樂器家にあり 其法をはらうなり 暦本 文純作院經作 翠平 簾 糸柾のわあるひろ 烏丸のふに製也 宿紙 西洞院の糸 院干代作 扇 糸の 法教寺 扇 源州の里 茶筅 二条坊門堂世堂許敬 藥 種 三条東洞院より 菓子 教 研井餅大佛餅 白散 典藥頭 調貢 牛黄圓 施藥院 解毒 丸 通玉菴 地黄丸 大黒屋肥後 奇應丸 紀州伊勢屋町

肝涼圓 阿波竹屋町 錦袋圓 二条沙羅所又紙屋町

名所

石藏 稲荷 泉川 石清水 石面 齋院 石川 今宮 岩陰 花山 松 羽束師社 西河 姫川 常盤 多洞 戸雛瀬 多地山 日吐 千代古道 音羽山 高羽滝 小塚 小倉山 小壁 賀茂 神山 鴨羽川 宇治 紙園 笠取山 麻背山 笠置 紙屋川 亀山 桂 淀 若田 神乐岡 竹田 玉川 玉井 紀 高 旋山 橋小路 園韓神 綴喜里 月瀬 月林 双岡 鳴滝 牧小河 中川

長岡　梅津川　紫雲内　宮沼　成生山　深
田井子　野宮　大内山　大井川　大沢池　大原
臨清水　大荒木森　男山　鞍馬　嵯峨山　雲林院
逢都　栗栖小野　山科　八幡山　八幡宮　欽明御
八瀬　槙尾山　桂河　松尾　紅葉　伏見　深草
後東　長谷杜　小倉河　狗　嵐山　愛宕　宵橋
川　飛鳥井　縣歩戸　栗田山　鈴日山　鳥山
清源山　深草山　警坂山　清滝　北野　貴布
祢　沸子洗川　義豆　磯原　白河　堀寵　紫

窟山　廣沢　日池　槙河橋　平野　芹川　縣小
川　炭竈里　長谷　長谷山　沸　壷岡　鏡山　芹生
里　三宝戸

神社

○八幡　并摂社　若宮　姫若宮　水若宮　上高良
下高良　狩尾　役神
○加茂　月上　若宮　新宮　土師尾社　藤尾社
鎮守社　大田社　白鬚社　福徳社　鎮守社
川尾社　岸岡社　諏訪社　沢田社　岩本社

奈良社　梶田社　流木社　杉尾社　棚尾社
橋本社　山森三間社　氏神社
日上　比良木社　河合社　小鳥社　三井社
久我社　霊尓社　末刀社
○下加茂
○松尾　摂社不見
○祇園　後見殿　蘇民社　与宮受福社　美御前
稲荷　護王地社　末社　宮者社
御倉上社　白狐社　明日荷田社　鴨社
御田社　末社　田中社

○平野　春日社　任部社
○梅宮　三石社　市杵嶋社　天王社　幸神　護王社
愛宕社
○大原　海童神社　瀬和井社
○吉田　神樂岡社　一言主社　今宮　宰川社
水屋社　氷室社　榎本社
○鎮魂八神
巳上

二之巻部　山城

北野貴船　今宮　愛宕野宮　木嶋
向日羽東師山崎離宮　水垂伊勢向
御香藤ノ杜城南岡田鴨田原宇治離宮
橋姫田中木幡清瀧小栗栖四ノ宮
粟田口　地主　新熊野若王子岡崎小野
瀧宮小野御靈落葉江文由木高野
御蔭　石蔵大宮大将軍七社惟喬

惟仁大将軍　文徳天神　鳴瀧貫之　炎天神
九頭八幡　御靈　京極八幡　幸神　晴明　櫻葉
白山　高倉八幡　蛭子若宮八幡　五條八幡　市姫
繁昌　新住吉　菅大臣　中山　俊成　新玉津嶋
五條天神　六ノ宮　炬火殿　吉祥院宮

日本國中大小神社三千一百三十二座

其外石清水　吉田　祇園　北野

号式外之神

右延喜式神名帳

伊勢　八幡　謂之宗廟

加茂　松尾　平野

春日吉田大和　龍田　謂之社稷

日本紀上記卷一

山城國　上・山背　山代　上・古此字ニ作ル

天照大神　天上ニシテ斎服殿ニ入セ玉ヒテ

神衣ヲ織玉フ　此服殿ノ下ニアタル国ヲ機

内五ケ国トノ一ヲ山背国トイフハ神衣ヲ

織玉フ御背中ノトヲリ也中古ヨリ城

ト書日リト訓　説　燕邦　橿原朝御世阿多根ノ

命為山代国造　舊事記　延暦十三年七月改

山背為山城ト云　拾介抄見

○八幡　山城国久世郡　一名男山　雄徳
山　石清水ニ此水山ノ半ニ有リ
哥
[illegible]
世[illegible]
[illegible]
祭レル神　三座
○譽田天皇中殿　玉依姫東　神功皇后西
譽田天皇　胎中天皇ニ應神天皇ニ申也
人皇十六代ノ帝也大和国桜井豊明宮ニ
都レ玉ヘリ　二十二年三月幸ニ難波岩大隅
宮ニ　四十一年二月崩于明宮玉フ　一云六隅
宮ニ崩レ玉フ　神社考ノ心ニ日本紀第十二安
○譽田天皇仲哀天皇第四子也母
気長足姫尊神功皇后天皇以皇后討新羅之年
歳次庚辰冬十二月生於筑紫之蚊田幼而
聰達玄監深遠勤容進止聖表有異焉皇
太后摂政之三年立為皇太子時年三歳　初天皇
在孕而天神地祇授三韓既産之完生腕上

其形如鞆足尻皇太后為雄裝之負鞆故称
其名謂譽田天皇四歳立為太子七十一即
位立神姫為皇后在位四十一年崩時年百
十一歳 日本紀

神系
日本武尊

足仲彦天皇

譽田天皇

神功皇后 気長足姫尊也 ○ 稚日本根子彦大
日々天皇 開化天皇之曽孫気長宿禰之女也母
日高額媛足仲彦天皇二年立為皇后初而
聰明睿智貌容壮麗傷天皇不従神教而早崩
征新羅々々王自服高麗百済知不可勝永
称西蕃不絶朝貢所謂三韓也皇后従新羅
還之生譽田天皇於筑紫立譽田別皇子為
太子在位六十九年甲寅四月崩於若櫻宮時
年一百歳冬十月戊午朔壬申葬於狹城盾
列陵

王依姫 海神女豊玉姫之妹神武天皇之母
神也 彦波瀲武鴟鵜草葺不合尊以

其嫗玉依姫為妃生神日本磐吾彦尊
日本紀　磐吾彦尊、神武天皇也

○八幡ト申事　輿言田八幡丸也ト ノ託詞
ヨツテ也　縁起　○八幡ト申奉ル事　應
神天皇ノ御廟河内国輿言田ニテ ニシ ニスナリ
宇佐ニ勧請アリテ和気清丸ニ託シ玉ヒ
テ我レハ輿田ノ八幡丸ト御名 来有シ
依テ也　兼邦ノ説　筑前豊前有八幡宮昔白
幡四赤幡四降于此故名八幡植松而為標

至今猶在リ　宇佐縁起ノ心　○八幡以古者赤白之
幡各四流天降為号予惟不然是特地名也
耳矣幡若非自天降之物非兩罔稲路之類
待人工而後成者也天何為者哉降此異物
也決非是矣　一書心　啓蒙之辨也
當山御鎮坐ノ事　和列大安寺之洪門行教
御告アリシユヘ也云、豊前宇佐ヨリ此ニウツリ
玉フ也　清和帝御宇有行教者姓紀氏武
内宿祢之後也昔武内宿祢為景行帝之臣

成務帝時為大臣而又為仲哀神功應神仁
德之輔佐是故行教応崇宇佐神神憑教欲
捷帝都辺遂移于山城男山神社考○釈行
教武内大臣之裔也居大安寺貞観元年詣
豊之宇佐八幡神祠一夏九旬昼讀諸大乘
経夜誦密咒法歳已満夢大神曰久受法施
不欲離師師迴王城我又隨行居王城側當
讓皇祚耳教漸著山峭其夜又夢大神曰師
見我所居俄覚便起見東南男山鳩峯上現

大光凌晨至光処実是霊區也教便録二事表
奏帝詔橘工部准宇佐祠規建新宮世言教
祈見大神本身於是弥陀観音勢至三像現
架裟上因是殿内安三像元亨釈書 外殿二安
置レ奉ル木像ハ教賞親王ノ刻彫レ王ノ
コロ也 諸神記

○摂宮

若宮 本殿ノ良二有 舊記仁德帝也 啓蒙

摂若宮 若宮ノ傍二有 二十二社註式云宇

礼姫 姉 呉姫 妹 同

水若宮 姫若宮之傍ニ有 舊記宇治皇子也

仁德帝御弟也 同上 仁德帝弟宇治皇子事平野下ニ見ユ

上高良 祭ル神武内臣也

按日本紀之説孝元天皇妃伊香我色謎命

生彦太忍信命是武内宿禰之祖父也景行

天皇三年屋主忍武雄心命詣紀伊国居阿

備柏原娶紀直遠祖菟道彦之女影媛生武

内宿禰由是見之孝元子彦太忍信其子武

内也事六君景行 成務 仲哀 神功 應神 三百十余歳

日本紀 心啓蒙 ○高良神記 五人是其略之

健將也末世大將タラン者常ニ五名ヲ唱言

セバ必神力ヲ加テ天下ノ武將為ン 俊論語

下高良 外院南ニ有 師時記云江師曰高

良太明神者武内大臣也非也高良者藤大

臣連保也神号云高良王命以千滿両顆

令奉行之故奉号王命云云 廿二社註式肩

書云石清水別當澄清曰上高良武内也下

高良王畝也　已上啓蒙

狩尾　本殿西半里計山中ニ有　舊記云件神石

清木地主社也即大国王命　啓蒙　大国王

命傳前記ス

下院　役神社也　社記云貞観二年六月十五

日行教造神殿云〇延喜式所謂山城国与

樵津之堺所祭之疫神者是也　啓蒙　応年

ノ者正月十八九日此社ニ群請スル也

〇八月十五日放生會之事　社記云扶桑記

云養老四年九月在征夷事大隅日向両国

乱逆ス公家祈請於宇佐宮其祢宜辛嶋勝

波豆米相擬神軍征彼国討其敵　太神託

曰合戦之間多致殺生宜修放生會者諸国

放生會始自此時矣　啓蒙　毎年八月一日ヨ

リ十五日ニ至テ諸所ノ魚ヲカヒ集テ十五日ニ

山麓ノ小川ニ放也放生川是也　早朝其

供養ノ為ニ神輿山下ニ下ヲ也　祠官祠僧

衣服ヲヨソヒ伶人樂ヲ奏シテ供奉ス神

輿下玉ヒテ法會アリ法會オハリヌレバ神
輿山上ニ帰玉フ也此度ハ祠宮等初ノ礼
服ヲヌギテ浄衣ヲ着レ白杖ヲツキ草鞋
ヲハノ也是蕘ノ伐ヲ移取ルトカヤ是日勅
使アリ上卿宰相辨衛府參向内藏寮
使受宣命自延久二年准行幸儀式府已
下供奉セリ　已上公事根源ノ心　第六十四代円
融院大延二年八月十五日放生會御雅楽
奏諸節會　第七十七代後三条院延久二
年八月十五日自今年上卿以六府馬寮准
行幸扈從御輿　○行幸始ハ簾中拔四輪
院御宇有八幡御幸　啓蒙　○三月中午日
有石清水臨時祭天慶五年四月廿七日始
号神社考
後奏雜抄　[illegible]
[illegible]
九[illegible]
放生會　年中行事會

世あくてつあるを此もすくはんと云るを故神のりこに彩中初之

○賀茂　鴨之訓也　鴨氏書日

受岩郡也王城之北半里バカリ二有リ

宮ハ鴨山ノ下ニ有　山名　神山　二葉山

日蔭山　御影山氏　和寄ニヨメリ

後拾

くてやとあるのゝ千早振神の社乃万代をかけ

神勅撰

神の御社に拾遺乃歌に賀茂重政

文永

神酒のくらの長乃三そ山茂乃葉ちらふん　李経

同

日ちかしのゝ

同

ちはやふる神の名ゝ長き代けてゝ思ひ　師光

祭レル神　別雷皇大神

廿二社註式曰日向国ニ天降坐須神於賀

茂建角身命ニ止申須神依磐吾彦天白毛乃御

前ニ坐天大和乃国葛木ニ宿寸彼ヒ子刑部

山背国岡大乃賀茂ニ迁幸山代川ニ下坐

天葛川止賀茂川止合処ニ立坐給北賀茂

川乎見巡之大宣久狭久少也止云正毛石

川乃瀧流也止天石川瀬見小川止号久川

上仁宮所於定給天北山乃麓仁住給利其
時此所乎賀茂止云也止　○豊葦原ト定
記云古仁八十万乃神達乎天高市仁集給
此神議仁議給天可遺神於尋出之奉利此
国陪鹿島仁坐寸武甕神香取仁坐寸経主
神止於下之千早振悪神於悉皆伏世順陪
奉天遂報申寸此後建角身命国々於見巡
之御座寸於是天鉏女命磐樟船乎撓奉利
尊於神代乃浦乃浪静奈留磯未天送利御

座仍天天乃神与利賜之神宝乎以天此国
乃固止成世王波牟止天北山乃麓仁應化
之百王於守利王布経津主武甕神毋同此
所仁垂跡之王陪利
○別雷者賀茂山名也是以為別雷神耶為
之別雷山神可也為之雷公神否也以鴨前
為賀茂氏之説賀茂固地名而人以為氏也
為取義於鴨前之説吾未聞焉　已上説啓
蒙三載之

山城国風土記云賀茂建角身命娶丹波国
神野伊可古夜姫生子名玉依子次曰玉依
姫玉依姫遊於石川瀬見小川（今賀茂川）時丹塗
矢自川上流下乃取来置之床辺忽成麗夫
遂孕生子至成人祖父建角身命欲知其父
造八尋屋竪八戸屏酿八醞酒而神集之曰
七夜遊樂謂其子曰汝飲此酒將杯与汝父
其子即舉杯置矢前向天窓屋甍而升於天
乃因外祖父之名号賀茂別雷神（神代系図）

○雷神　伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智為
三段其一段是為雷神（日本紀）
神系図
●神皇産霊尊
天御食持命（日本紀保食神）
天道根命
天神魂命
賀茂武津之身命
玉依子
玉依姫（下賀茂御神）
別雷命（上賀茂）

正統紀云武津之身命為八咫烏為神武帝
軍先道　已上系四傳　元亨釈書行圓傳ニ
此神之傳アリ少異太同也尤ニ記ス
釈行円鎮西人寛弘二年遊帝城頭載宝冠
身披草服都卞呼為草上人四持千手大悲
陀羅尼又欲得好栈刻其像一夕夢沐円来
告曰明日送尓異林翌朝果一僧至語云賀
茂神祠側有槻木苔蘚封不知幾千百
歳其外似朽内甚堅実毎至六齋日槻畔有
誦千手神咒音近見無物遠聞有色自古為
為異木是子之所求材也古老傳言昔城北
出雲路有小女臨鴨河浣衣一箭泛流而來
女取見之鴨羽加苫女携還家掃饌享自此
女娠已而生男兒父母問其夫女曰無父母
以為匿也兒三歳父母戯曰世豈無父而有
兒乎思此里人乎宜具酒膳大宴里夫令此
兒持杯試告以此拯置汝父所其得杯之
人便兒之父也議已多貪鄉人數爵之後令

兒送柾時兒取柾穿與人出堂而置簷上鴨
箭所父母及諸脅怪之相議曰是箭屬鴨羽
宜殺此兒為賀茂氏於是兒化成雷上天母
又同時登天而去今之賀茂中祠昔為田中
時田主已攜秩數畝其苗俄變成槻樹母氏
降樹下為神今賀茂中宮是也兒又降為神
賀茂上宮是也其槻歲久偃仆世貴為灵木
不危樵材故至於今也子乞神官刻菩薩像
四喜而請神主告事神主不靳不日而成像

長八尺營行願寺安之 釈書●私曰一条草堂是也三十三所順礼所也
若狭彩色神社と宮乃みくしの別雷の社のこと神
○當社鎮座之年紀秘シテ不語況神之御事
哉并八所之摂社末社等モ同シ云ク○社家
深秘無申旨故難露顕 神祇正宗○凡帝都守護
神明何不疎別而賀茂明神之守護深重也
太子馬腦記○公家悉以當社祭祀為日本第一之
神事日供即為寛治勅願豈非朝家無双之

礼奠哉　貞永元年六月廿日之宣旨

○櫟社

若宮　本宮東傍　新宮　若宮東　上師尾社　御札

屋前　藤尾社　新宮南　鎮守社　本宮東　府岡山麓

太田社　自本宮五六町東也　白髭社　太田社　辰巳　福徳社

鎮守社　共太田社南神宮寺　川尾社　回廊丑寅　玉垣ノソト

南石橋ノ南三有

厅岡社　訪諏社　共本宮楼門外川東南側有佰

厅岡八東スハ南橋殿クギナリ

澤田社　防波社南　岩本社　沢田南橋本　奈良社　沢田

南鳥居右　梶田社　奈良社南　流木社　梶田社ヨリ辰巳方

川東也

枚尾社　本宮傍未申　棚尾社　四足門脇橋右方ホ社　橋本社

四足門内

楼門回廊西石橋

北傍

氏神社　一鳥居外未申　山森三間社　本宮西方

岩本　橋本社　神祇拾遺云住吉和歌之

両神也葉平実方常拝二社祈和哥之本乃

矣遂家風成響溢海内之故世人称為両神

化現云々　徒然草ノ説ハ右ニ異ナリ　実説乃云々

猶ケ八葉平家ノ乃ちいひまぐ給ヒバ

一年ニ糸をりしに起ふる文月ハ七夕とぞ

めぐり給ひて天竺にみやゐしかの新めらうけうの
と給まで横をやゐ給水のとゝれどと云へ給ふ新
の和尚　月ぬめぐりぬと雖も一のやさしき人々
こゝふ立ちと強かひくうは岩ゐ社とこゝ
とゝ給まで云ふ文略く

棚尾社　撰集抄　そのこと給ふ泡うの主けうをひて
世とゝはれて仮も雲ゐ乃社くとゝけうと年たく
なりて宮ゐ方に俗乃しくぎ又返ゐくゐまゐ
とて仁安三年十月十九の夜ゐくゐ部西つれとく

ゐかの社乃ゐとに立ゐ給ふ法華経ゐけうゐ
この乃月ゐのくにて考ちし給びゐ乃
いなほく給ふれど

かゝこゆゐるゐ須ゐけうゐくとうゐ
賀茂社中に有一言主神　賀茂氏久歌曰
ゐくゐ給ふゐとゝ給ふ神社考
○賀茂皇太神御託宣
一度吾前に來りて一礼を成す者は其思を
しるべかヒて神力を加て思ヲトゲンにしてに馬

重テタノ一シ人ニオヒテヲヤ　倭論語

むかし摂川に恵心僧都ときこえたまひし高き御僧ありて
うれしき所に住みけり延宝年後りて法の声つきずとも
ともどもしかるべき人し或年の秋七月の比ほひ京都
くゆりてなりしかる所をいひふかでんすみくださ
なれどもおまけやしかひなるに行あらそふかはらん
ときの嵐もさびしくて月の光もやすらかにあり
れども陰の雲の毛のさしぐんで月を待ちわたる
ねとみて行り給ひてさりし寄の庭どりもなけりさ

見て行とかくなれるにつけてこそ世にすぐれた
みさきまは思ふれくれしもかはらぬ月の内
よりも織らぬなさけとぞ思ひ出せり
つゆのきよせけり竹にて結ひむすびて
としかしなれど僧都をりたつぬるとき
月花のなさけを思ひいでけるこそ　と仰さ
れなれど僧都も深く思ひうかべてあり西口
と思ひ出をさめたる所の内に入れてありしと
侍へるとかや　下ニ畢ル　撰集抄

斤閣社

千載集 ちはやぶる神のいがきもすぎがてにいかにとかけし賀茂の葵を 賀茂改平

大田澤　社ノ前東ノ方ニアリ

神ヨミ大田沢乃杜　あかねさす日の光にあたらしき葵かざしの神のいがきは 俊成

○斎院

凡天皇即位者定賀茂大神宮ノ斎王簡内親王未嫁者ト定若無内親王者依世次簡諸王女ト定 神社考 延喜式 ●私曰諸王ノ事職原鈔ニ見エタリ

平城帝嵯峨帝位ヲアラソヒ王ノ時嵯峨帝御祈願ノ事アリテ皇女有智内親王ヲ以テ始テ斎院ニタテテ王ヘリ其例相續テ立王ヒシヲ土御門院元久元年三十四代之斎院ニ至リテ断絶シ王ノ也 請書ニ記ス神社考心

賀茂斎院ト定アリテ後東川ニ望王ヒテ御禊ノ事アリテ直ニ初斎院エ入王ノ初斎院トハ大内ノ中大膳職或左近府ナンドヲ黙ジレテソレニテ三年潔斎ノ事アリ其年ノ四月ニ御社エ参王ハントテ祭ノ前ニ吉日ヲ

エラミ一ノ又御禊ノ事アリ則紫野ノ野宮
二入王ノ是ヲ二度ノハラヘト云フ叔中ノ酉ノ月ニ
賀茂社工奉王ヒテ祭ノ事ニ隨王ヒ也上巳
花鳥余情　按ズルニ野宮ニ所ニアルカ嵯峨之
野宮ハ伊勢ノ斎宮ノコモリ王ヒ所也是ニモ
サヽ〻ノ儀式アリ　源氏物語ノ鈔物等ニ記
セリ　又此所近ワ久リニ川有有柄川ト云フ
也是モ同名ニ所ニ有　○有柄川ハ斎院ノ
オハシヽス本院ノカタハラニ侍ル小川也　袖中抄

千載　ちくさの花ぞ秋の有柄川
夫木　ちくさの花ぞ秋の有柄川
　　あきの有柄のたく舟はやみ　形恒
　　右芝ちくさの花ぞ有柄川　ちり
一無名抄　有柄川　ちり　○ちくさ川のひたぬ
　　しのぶ草　ちくさ　けふ　有柄川　ちり
　　ちくさ　有柄川　ちり
　　右ちくさの花ぞ有柄川　又ち有柄　ちくさ
月
　　夕ちくさの花ぞ有柄の山ふ　ちくさの花ぞ　経信
太神宮ノ斎宮ニ同ク忌ノ詞等有テ佛法

息ヲノゾカルヽ也　詞花集ノ詞書ニ

[illegible]　選子内親王

○祭之事九祭トバカリ云フ時ハ當社奏祭ノ事也トカヤ　縱ハ山ト計云フ時ハ比叡山ノ事寺ト計云フハ三井寺ノ事成ガ如シ

四月中ノ酉日也人皇廿代欽明帝之御宇ニ始レリ葵ヲモテ神宮ニカケ用ル事神秘ノ子細有リトカヤ　堀川百首顕仲朝臣奇

[illegible]

此日社家　天子將軍其外諸家エモ葵ヲ献スル也　天子ノ玉簪ニモ葵ヲカケラルヽト也

[illegible]　栄雅

今日女ノ髪ニモカケヽルト也

[illegible]　後京極　家隆

又日陰葛ヒイヘリ　蔓羅　日本紀

[illegible]　後伏見　後二条　正三位　成次

蔡祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云フ也云〻

玉依姫ノ別雷神ヲ産ヒシ所也御形ニ

御生ニ書祭ノ前ノ日ヲミアレノ月ト云フ也

御生所ハ神館ニアリ祭ノ時ノ御旅所也

花鳥餘情見

[illegible] 山家集 西行

御形野 御形山寄ニ詠ゼリ 是ハ下鴨ト

云フ説有 後人之考ヲ待者也 又上鴨ノ

高野ノ辺ニ御形山有云々 實説未考

風雅 [illegible] 賀茂遠久

[illegible] 賀茂季保

○因云鴨川鴨羽川ニ 瀬見小川ニ

[illegible] 玉葉 顕綱

[illegible] 前太政大ト

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

判ぜていらく所川せゝの小川ゝと云及ばゝと紅花
うくつゞきたるゝ岳のぐ仏ゝ者ゝ多ゝ宮む
へしこれとゝきゝ伝ふ形脈ゝ多ひ多りし河ゝ中
ゝ多ゝ宮ゝ川乃宮名ゝ社乃縁起ゝ仏
ゝ中せゝ水ゝ宮ゝ多下略ゝ多抄

○いなゝ宮ゝ川奇ニヨメリ畧ス　○御手洗川
神山ヨリ流出テ賀茂ノ社貴舟ノ宮岡ノ社ノ
中ヨリ折レル小川也　河海抄

○賀茂祭四月中酉日也未日也上卿着陣

召六府課驚固朝廷彼献走馬其日勅使近
衛中少将勤之昔有神夢人々懸葵蔓花髪蔓
先一日賀茂松尾社司献葵花髪蔓此祭始于
欽明帝之時花鳥餘情　河海等ノ心神社考
又賀茂国祭者四月中申日也欽明帝撰吉
日行之和銅年中詔山城国司令撿察之
○賀茂臨時祭者十一月下酉日也　寛平
御記載宇多帝潛龍時侍従放鷹狩于賀茂
辺俄天陰霧降東西迷路帝臥藪中憂恐之

甚有一翁来告曰吾此辺之老翁也春既有祭冬未有祭願賜冬祭帝心為賀茂明神也因答曰吾力非所及宜被奏請于内翁曰吾知其力之所可及願自重而勿軽矣言已不見帝大怪之未幾仁和三年八月二十六月立為皇太子即自即天皇位於是信神言而寛平元年十一月二十一日始行賀茂臨時祭左近中将時平朝臣為勅使藤原敏行詠東遊歌外記内記云東遊男二十人左右少将侍従等皆着青摺ノ　已上神社考

臨時祭　五十九代宇多帝寛平三年十一月廿四日庚午日於賀茂明神有走馬事勅使右兵衛督藤原高経卿男二十人参上下社可舞云〻○臨時祭ヲ賀ル哥

新勅撰

いとけなく養ふ〻ほどの衣ゝ哉のそ〻ん　法華寺入道

同

山ゆかぬ人ゝ哉ゝ我神ゝ哉ゝ　貫之

○五月五日之走馬社家第一ノ神事ナリ

○式部太輔實重八賀茂工参事ナラビ無キ者也前生ノ運才ヒカニレテ自ニスギタル利

生ニアヅカラズ人ノ夢ニ大明神ノ又実皇來リ
イフマウハトテナゲカセオハシマス由ミケリ
実皇御本地ヲ見奉ルベキ由祈申ニ或夜
下ノ御社ニ通夜シタル夜上エ参間流木ノ
辺ニテ行幸ニノヒ奉ル百官供奉常ノ如
シ実皇片蔵ノ中ニカクレテミケレバ鳳輦ノ
中ニ金泥ノ経一巻オハシマシタリ其外題ニ
一称南無佛皆已成佛道トアリトオボエテ
夢則サメヌトゾ　宇治拾遺巻四

○下賀茂　王城ヨリ五六町子丑ノ間也
平森ノ中ニ宮ヒアリ此所ヲ糾トモイヘリ又糾
ハサシ入ニ有ル南向ノ宮ヲ云フ也　河合トモ　新古慈四
[illegible]　モ葉俊成
[illegible]　夫木与家
[illegible]　山家集西行
祭レル神　二座　玉依姫　大巳貴命

至依雅　前ニ記ス則別雷神ノ尊母　御祖神
ト申ス是也　夫木集三條入道左大臣ノ歌
久かたの月のかつらのひとえだに　れむ世の秋の秋の名ぞ
大己貴命　素戔嗚尊子也系図上ニ見
素戔嗚尊降到於出雲国娶奇稲田姫遂到
出雲之清地焉乃言曰吾心清清之於彼処
建宮相與遘合而生兒大己貴神
大己貴命与少彦名神戮力一レ心経営天下
復為顕見蒼生及畜産則定其療病之方又
為攘鳥獸昆虫災害則定其禁厭之法是以
百姓至今咸蒙恩頼　已上日本紀

○摂社

比良木社　當所地主神也
河合社　式称小社宅神是也上賀茂社官
参宮之日先詣此社而後拜御祖盖有社例
傳習也　已上啓蒙
小島社　河合之東ニアリ
三井社　或三身社ト三座有

久我社　　末刀社　共本宮之北ニ有

靈璽社

本縁神秘也云〻○下上ヒニ行幸之始ハ六十代
朱雀院天慶五年四月二十九日也日上
祭之事上賀茂ニ同シ　六月洗手水會十八
日ヨリ晦日ニ至リテ諸人群参ス上賀茂ニ共
九日晦日ニ神事能有此事往昔ヨリ三伏
ノ祓也是ヲ夏越祓ト云フ也昔ハ神官悉
川辺ニ集會シテ夏越ノ儀式アリ貴賤

川頭ニノダヽミテ祓ヲシケリ今ハヲトロエテ
其遺風バカリ也云〻○邪神ヲ祓ナゴムル故
ニナゴシノ祓ト云フ也八雲鈔ノ心　夏祓　夏越
和難　ヒ○天照太神皇孫命ヲ葦原中国ノ
王トセントス彼国ハ蛍火ノ神　蠅聲邪神
多シトイヘリ是ヲ祓和ルトテ六月祓ハスル也
園太暦　六月祓ヲヨメル和哥
片撰　かゝる川のみそ底清く照る月をなかめてこんとや夏祓せん
　　祓せんと麻の中ゝ千ぢ祓せんと清くかゝれる川の也　入道内大臣

世中[illegible]

風雅集 [illegible]

○松尾　葛野郡　都ノ西南　二里餘ニ有

新古今　万代を松尾の[illegible]

一条院の[illegible]

[illegible]

後拾遺　千子振松尾流[illegible]

源兼澄

祭ル神二座

大山咋神　大巳貴神分大年神之子大山咋

神此神者坐淡海之比叡山又坐葛野郡松

尾鳴鏑神也舊事紀

家古世丹波国皆湖也其水赤故云丹波大

山咋神決其湖丹波水涸成土矣以鋤為神

體此神者即松尾大神也系図傳

○大歳神

大国御魂神　韓神　曽富理神　白日神　聖神　天香山戸神

御年神　奥津彦神　奥津姫神　大山咋神

南殿　神酉跡神秘也云々

別雷苗裔神也氏成秘記　○市杵島姫也

二十二註式　○大中臣定好松尾鎮坐記云元明

帝和銅二年四月十一日山城国山田庄荒

子山於賀茂初奉傳云々

○造神殿文武帝大寶元年始於秦都理北二

社註式　已上啓蒙

月讀　松尾已前之鎮坐歟顕宗帝三年依

神託被奉鋤荒撰田押見宿祢侍祠云日本紀

○顕宗帝献山背国葛野郡歌荒巣田十五

町以為月讀神地　歌荒巣田在大堰河之

西南即今松尾之東南地是也　○文德帝

仁壽三年春夏之間疫疹流行病之時神現

形曰我是大堰河濵所居神名為月讀神我

居近河頗有氾濫之患今欲移居於松尾之

南山若能敬祭我者災害當自消矣帝得神

語大悦乃會廷臣祭之隨神誨遷宮于彼地

以祭之自是以來天下毎有疱瘡之疫人無

貴賤詣此社以祈神之佑云 三代実録ノ心 神社考

○今所傳七座名

松尾社　月讀社　櫟谷社　三宮

宗像社　衣手社　四大神　啓蒙

○祭八四月上申日十一月上酉日人皇五十四代仁明帝承和四年三始也　祭ノ日賀茂下上ノ宮三同ノ内蔵使山城使等當宮ニモ立ツ也賀茂三同ノ帝城守護ノ神也　按ニ山城使内蔵使ノ事職原鈔ニ見ユ

玉葉集詞書ニ正月八日松尾祭使ヲ立テ

[illegible]

○御位　三十六代清和帝貞観八年十一月九日正一位　使同賀茂　散市二前　廿二社註式

○頭大社事始　六十六代一条院寛弘元年甲辰十一月十四日

○初以秦氏為神官事　松尾鎮坐記云元

明帝和銅二年四月十一日秦良鮪同正光
荒子山松尾為守護留ト　已上啓蒙
○松尾神託　諸人ノ一心ニ一礼ラナスモ
無量ノタスケアリ一念正直ノ大
道ニイランモノ也　倭論語
○釈空也在雲林院二日入帝城有先翁倚
坡垣其貌甚寒甚歯相戰也曰尊老凛寒何
立此乎對曰我是松尾明神也頃受般若法
味未上白牛繞之車以故貪癡之風逼我

虜師無法花願有意乎也脱衣度与曰我者
此衣讀法華者四十年其姿香薫皆染是衣
今献之可乎神悦受之便被身相温如無復
寒気　九亭釈　○建久七年七月雷折松尾
祠後大秋其木覆神殿欲斬之其材大難制
恐厭神殿若不伐異時小凡南又自壓倒神
官与僧延朗議朗曰莫慮早伐又枕中有奇
事耳已而加斧其杉如相避仆殿側於是手
杉中忽迸出一漆塔其内又有銅塔盛舎利

神官見之益信朗言便於祠之南建三層塔
安之池側有大石自髮老人常坐其上朗問
何憂來此對曰松尾明神也擁護師法又聽
師誦法華故數來耳又我奉師給使者二人
以是為信言已不見朗謂徒曰二羽來男子
等莫怪果如神言其石今尚在焉亦來二鳥
外餘羽不入 朗安元二年移松尾山南家福
寺 九宮釈書

○祇園　感神院ト号ス　愛岩郡八坂郷

和哥ニ祇園トヨメリ　後拾遺神祇之部
伝三条院の四時祇園会行幸ありしかの
うつしべきものうつしたれば法ろ　拾遺
ふる社万代をさかえむとうつす
祭ル神三座　素戔烏尊中　八王子東
稲田姫西
牛頭天王　感神天王ニ　素戔烏尊也
此神有勇悍以安忍且常以器泣為行故令
国内人民多以夭折復使青山変枯故其父

母二神勅素戔烏尊汝甚無道不可以君臨
宇宙固當遠適之於根国矣遂逐之 日本紀
又云於是素戔嗚尊請曰吾今奉教將就根
国故欲暫向高天原与姉相見而後永退矣
勅許之乃昇詣之於天也素戔嗚尊昇天之
時溟渤以之鼓盪山岳為之鳴响此則神性
雄健使之然也天照大神素知其神暴惡至
聞来詣之狀乃勃然而驚曰吾弟之来豈以
善意乎謂當有奪国之志欤夫父母既任諸
子各有其境如何棄置嚴就之国而敢窺窬
此處乎奮稜威之雄詰発稜威之嘖責而徑
詣問焉素戔嗚尊對曰吾兄無黒心但父母
已有嚴勅將永就乎根国如不与姉相見吾
何能敢去是以跋渉雲霧遠自來參不意阿
姉翻起嚴顏干時天照大神復問曰若然者
將何以明亦之赤心也對曰請与姉共誓天
誓約之中必當生子

○系圖

伊特諸尊
伊特毋尊

大日孁貴 天照大神 素戔嗚尊ヨリ前世系之
月夜見尊
蛭兒尊
素戔嗚尊

少將井　稲田姫也　○素戔嗚尊自天而降到於出雲国簸之川上有一老公与老婆中間置一少女撫而哭之素戔烏尊問曰汝等誰也何為哭之如此耶對曰吾是国神號脚摩乳我妻號手摩乳此童女是吾兒也号奇稲

田姫所以哭者往時吾兒有八箇少女毎年為八岐大蛇所吞今此小童且臨被吞無由脫免故以哀傷素戔烏尊勅曰若然者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣故素戔烏尊立化奇稲田姫為湯津爪櫛而挿於御髻乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒并作假庪八間各置一口槽而盛酒以待之也至期果有大蛇頭尾各有八岐眼如赤酸醬松栢生於背上而蔓延於八丘八谷之間及至得酒頭各一

槽飲醉而睡時素戔烏尊乃拔所帶十握劔
寸斬其蛇至尾劔又少缺故割其尾視之中
有一劔此所謂草薙劔也又日本名天叢雲
劔蓋大蛇所居之上常有雲氣故以名欤至
日本武尊改曰草薙劔素戔烏尊曰是神劔
也吾何敢以私安乎乃上献於天神也然後
行覓將婚之処遂到出雲之清地焉乃言曰
吾心清清之於彼処建宮時素戔烏尊歌之
曰夜句茂多覓伊都毛夜覇餓岐覓磨語昧
尓夜覇餓枳菟俱廬贈廼夜覇餓岐廻乃枳
与遣合而生兒大己貴神

○昔北海武塔天神素戔烏別号也通南海龍女稱
姫日暮借宿路傍有二人兄曰蘇民將來弟
曰巨旦將來兄貧弟富天神借宿巨旦不借
又求蘇民許之以粟柄為座以粟飯為饗後
天神殺巨旦喪其家以茅輪与蘇民曰吾是
速進雄神也後世有疫則汝蘇民將來子孫
以茅輪應者之腰將免　備後国風土記

一説云進雄借宿諸神皆不許之時有蘇民
巨旦者兄貧也兄貧而仁慈富而吝進雄借
宿巨旦固拒之不容蘇民出迎而勞之則饌
以粟飯尊大喜欲報之其夜命蘇民渾家帶
茅輪即有大疫除蘇民家皆遭殃亡神亦教
之云後世疫気流行天下一小簡書云是
蘇民將来之子孫并為茅輪此二物絲之衣
袂則必免兵按備後風土記以是為北海民
塔神通南海神女時事武塔神乃進雄之別
号其祠見今在波国云疫隅社今六月御霊
會於四条京極供粟飯蓋起于蘇民縁云

八王子　三女五男也　天照太神乃索取素戔烏
尊十握劔打折為三段濯於天真名井齩然
咀嚼而吹棄気噴之秋霧所生神号云田心
姫次湍津姫次市杵島姫凡三女矣勅曰其
十握劔者是素戔烏尊物也故此三女神悉
是尓兒便授之素戔烏尊此則筑紫胸肩君
等所祭神是也　已上三女　素戔烏尊昇天之時

乞取天照大神髻鬘及脫所纏八坂瓊之五百箇御統渴於天眞名井齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神号云正哉吾勝々速日天忍穗耳尊次天穗日命次天津彦根命次活津彦根命次熊野櫲日命凡五男矣是時天照大神勅云原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾息乃取而子養焉　已上日本紀

○午頭天王初再跡於播磨明石浦移廣峰其後移北白河東光寺其後移感神院　二十八社式

○貞観十一年始天王從播州迁坐　改暦事記　雜

奉祭午頭天皇也歷年數後為平安城東方守護奉勸請祇園荒町　啓蒙

○人皇五十六代清和帝貞観十八年移八坂郷云　便覧

○第六十四代円融院天禄三年以祇園為日吉末社　慈恵大師記

○摂社

後見殿　本殿ノ丑寅ニ有神大己貴命　傳系前在

蘇民将来社　南門内左社

今世傳笥盥内傳有蘇民惠素戔烏之辨

也不可信不可執之

与官受福社　拜殿ノ傍ニ有

美御前　本殿ノ東ニ有

社家流云素戔烏尊所生之三女神也啓

護王地社　在下川原

於當社尤有習王城守護神也　啓

宮者殿　四条京極祇園御旅所ノ傍ニ有

與世所謂此神誓文起請赦免社也云々依此

考則唯一所傳起請返神乎起請反者起請

文上書夫印以奉神供一七日祭之誠唯受

一流大事非其家則不傳也祇園末社有此

神又宜也　啓蒙　○世三土佐正尊ヲ祭ルト

云フハ非也部人渡世ノ諺トシテ請文ヲ

云フ事限ナレ然共八十月廿日此神ヲ祭バ

神其外ヲユルシ禍來ラズトイヘリ此故ニ其
日群參スル事限リ無シ神ハ正直ノカウベ
ヲシテフレヲフト云事タレカ弁ザラン偽言
ヲモテ人ヲ誑セシヲ神何ゾ是ニクミシヲ
ハン幣帛ヲエテ其外ヲ許ヘバ悪ヲスム
ル神也辨フベキ事也神ノ御事神秘ト
云ヘ其家ニ入テ可尋事也
○祇園祭之事
四獸院天禄元年六月十四日始御昇會

今歳行之 二十二社註式
臨時祭 同三年六月十五日始被奉走馬
勅樂東遊御幣等使左少將藤原理兼
左右御馬有五疋右近官人供奉東遊哥畧
此後中絶才七十五代崇德院天治以後毎
年相續 已上 已上略
○崇德院天治元年六月始寄御輿儀式同
平野勅使殿上五位奉東遊有宣命今日又
有走馬勅樂 神社考

○行幸始ハ七十一代後三条院延久四年三月二十六日

祇園之神詠　玉葉集神祇部

[illegible]

○稲荷

紀伊郡　帝城之東南二里バカリニ有

昔ハ今ノ宮地ヨリ十餘丁山中ニ有坂アリテ諸人参詣ノ便アレケレバ今ノ地ニ引奉ルト也　旧宮ノ跡今猶アリ

玉葉

[illegible]　源頼政

風雅

[illegible]　[illegible]

旧宮ノ道スガラ坂有坂ヲ讀ル和哥

堀川百首

[illegible]　忠房

清少納言初午ニ詣レニ坂ヲ登レガクルシカリシ由枕双紙ニ書リ

瀧有

拾遺

[illegible]　後拾遺

祭レル神三座

大山祇女　下社　非木花開耶姫

倉稲魂　中社　月名異神有三神

土祖神　上社

豊葦原卜定記云辰巳乃方仁當天倉稲魂乃苗跡阿利夫此神波百穀於播玉故仁名奉神代乃昔与利此峯仁剛玉母不知只三峯仁顕玉之波人皇十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁苗跡寸誠仁諸人辰燐乃御心深久蒼生作弁物波草乃片葉

末天百乃於穂玉　全文畧之　啓蒙

今傳五座説

田中社　今八本宮ニ奉移ス　東福寺ト稲荷ノ間南側人家ノ中ニ有其所ヲ田中町ト云也

四大神　四柱兒神也

已上之加ニ二座ヲ為五座　享○弘長三年有吉文永年中奉併也　已上　神祇拾遺　啓蒙

○神殿　延喜八年ニ故贈大政大臣藤原朝臣時平修造件三箇社者也　二十二社註式

○別宮幷摂社

御倉上社　三座　本宮之後丘ニ有

白狐社　同所左ニ有

明日荷田社　地主神上社傍ニ有

鴨社　本宮之乾ニ有

御田社　非太田　大鳥居之内南ニ有　已上啓蒙

○御伝　人皇六十一代朱雀院天慶三年

庚子八月廿八日従一位　使四位一人帯

三前　宣命黄紙　同上

○祭　四月初卯日　天暦勅文ニ　称宜祝

供社春秋祭云々　同上

○行幸　七十二代後三条院延久四年三

月廿六日　同上

○二月初午日当宮ニ参事　元正帝御宇

當社影向之日偶二月初午日也故至今用ニ

此日ヲ神祇拾遺

○號ヲ稲荷ト中事　空海師東寺ノ傍

ニテ稲ヲ荷老人ニアヘリ是神ノ化事ヲ悟

テ即祭納テ東寺之鎮守トス此故ニ今祭
ノ日御旅所ヨリ本宮ニ還リ至フトキ神
輿ヲ東寺ニ成シ奉レバ東寺ノ塗内ヨリ
役當アリテ神供ヲソナヘ寺僧出テ真言
密乗ノ行ヲナシ事オハレバ神輿本山ニ還
玉フ也是東寺ノ鎮守ナルユヘ也老人ト化
シ玉フ時稲ヲ荷ヘルニヨツテ此号有トス
又ト部兼邦記云稲荷之事一説弘法大師
入唐之時御供被申共有和銅年中ニ稲荷

山ニ勧請也云々　右両説ハ両部習合歟
唯一神道説云當山之地主神荷明神ノ
地ニ倉稲魂ヲ鎮坐シ奉ル故ニ倉稲ノ
稲ノ字ト荷田ノ荷ノ字ヲ取テ號トス
夫此神者本朝衣食祖神倉生安逸霊社也
何人不敬云々
○京極ノ上極樂寺真
如堂ニ稲荷ノ神躰ト称ノ初年日周帳シ
ケレハ男女群詣ス其像ハ弁財天ニシテ白
狐ニ乗レリ傳云數十年前此神躰當寺エ

質物トシテ來ヲ也ト此日札守ヲ出ス三モ
其像ヲ卯也予按ルニ両部習合ハ神躰ヲ
立ツル故ニ弁才天ヲ号スル事サモアラン
カレ但質物トシテ當寺ニ來レル事ハ信
用シ難シ別ニ子細アレ所本縁ノ筆記紛失
スルニヤ夫神者不測之霊号也仰之弥高欲
鑽之則玄妙幽遠也何以現其形耶以有示
無号以無示有喩一輪月鉦洪海鱗微露亦
應太小無不宿也神誓又如此乎鳴神道微

而学者稀也以此誤著為實事遂充不実於
天下者乎一人傳虛則天下悉傳虛者蓋此
謂哉　神社便覧ノ心
○當社　鍛治ヲ始メ一切ノ金物師信仰シテ
十一月八日章嚢祭トテ此神ヲ祭奉ル事ハ
當山御垂跡ノ時天上ヨリ章嚢ト云フ物ヲ
持下リ玉フ故也トイヘリ是俗説ノ誤也云ミ
昔三条小鍛治ト云フ者當山ノ垣土ヲ以テ
刃ノ士ニ用ケレバ比類無キ劔ヲウチ出ス

ル故其後ハ偏ニ當社ヲ信敬シ奉テ猶上ヲ
用ルトテ數當山ニ往來シケル也是理ヲ
不知メ金工ノ守護神ナル故小鍛治ハ信
仰シケルト流布シケルト也

○稲荷明神ノ託諶　諸人ヨ鬼神天魔
ヲ嫌ヒニクム事ナカレ大悲心ヲオコシテ
経多羅尼ヲヨミサヅケヨ仮初ニモ是ヲ
降伏スル思ヒヲ成ベカラズ汚レル世ノ衆
生ハ悪キ心ニテ祈シリゾクル故ニ終ニ子

ガヒヲミウル日ナレ　倭論語

○續古今神祇部　稲荷明神ノ歌

詞花集詞書　歌の処ろを

祈ドケル法師ノ長ケ社ノ

○高博ト云シ人ノ母重病ヲウケテ存命

不定ナリシガ逝テ不還ハ盛年ワカレテ
會ガタキハ悲ノ親也イカヾセントテサマ
ザマイタハリケレドモ終ニ療茶ノ効ナカリ
ケレバ稲荷ノ社ニ七ケ日參籠シテ毋ノ
病ヲ祈申ケリ第七日ノ夜深更ニ及テ
心ヲスマシテ琵琶ヲ抱テ上玄石象ノ曲
ヲ彈ゼシニ折節御前ノ燈爐ノ火キエナ
ントシケルヲ御室殿ノウチヨリ玉簾ヲ
表上テ外童一人出現シ灯ヲカヽゲヽル

高博ニラガミ奉リテ神盧ノ御納受タノ
モシリ覚テ下向シタリケルニ母ノ重病
タチドユロニ平愈メ更ニ恙ナカリケル
下畧ス盛衰記十二

○平野　葛野郡　王城ヨリ一里計西也

この平野平野ともかくの代々八幡宮能宣
ひとしたげ之平野ともかくの名ばかりにてらるらく　円元捕

桑レル神四座

今木社　久度社　古周社　比咩社

芽一御殿源氏才二平氏才三高階氏才四
大江氏都八姓祖神在要　公事根源

今木社　日本武尊也
大足彦忍代別天皇立稲日大郎姫為皇后
生二男才一曰大雄皇子才二曰小雄尊一
日同胞而双生天皇異之則誥於雄故因号
其二王曰大雄小雄也是小雄尊亦名日本
童男亦曰日本武尊　日本紀

夕度社　仲哀天皇也

日本武尊才二子也母皇后云両道入姫命
天皇容姿端正身長十尺雄足彦天皇成務
無男故立為嗣　同上

古用社　仁徳帝也　大鷦鷯天皇同

譽田天皇才四子也母曰仲姫命五百城入
彦皇子之孫也譽田天皇崩時太子菟道稚
郎子譲位于大鷦鷯尊未即帝位爰皇位空
之経三載太子自死要二十四歳遂即位在
位八十七年崩時年一百十　同上

系円

●大足彦忍代別天皇

足仲彦天皇

日本武尊

稚足彦天皇

譽田天皇

大鷦鷯天皇

比咩神　天照太神也但依所傳註上

縣社　天穂日命也　中原　清原　菅原

秋篠　四姓神也

素戔烏尊滝右瓊置之右掌而生兒天穂日

命此武蔵国造上師連等遠祖也　日本紀

○垣武天皇延暦年中立件社　延喜式

○摂社

春日社　任部社　啓蒙

○御位　正十六代清和帝貞観六年七月

十日正一位　幣四前　二十二社註式

○祭　四月十一月上申日

貞観元年十一月九日始祭　或垣武帝延

暦被始行之　又云嵯峨帝弘仁始之

又云文徳帝仁壽元年十月始之

○臨時祭　六十五代花山院寛和元年四月十日始以殿上五位為使以近衛府官人為舞人陪從（ベイジュウ）有御拜九大臣已下參仕座自今年始平野祭被奉遣使臨時舞人走馬九衛門佐藤原惟成（コレナリ）為使有　寛和　啓

○御幸始

六十四代円融院天元四年十二月廿日　円

○神託　諸人（ヒロビト）心清（キヨ）カ　ハ神明（ミヤ）授（サズ）ケ心ニ

移リテ思ヒトシテ心ノ一ニ上ニ　サルハ無シ

縱バ水ノ清ニ天ノ月ノ浮ブガ如シ　倭論語

○梅宮　葛野郡梅津里三有　土城二里許

西也　里川和哥二詠

彩色（ヒイロ）　文丹（ふみに）　梅の花　咲き　散り　ぬ　ら　む　ま　で　に　ま　た　も　梅津川　せ　き　ま　ち　ぬ　る　か　な　（詠人不知）

雖少僧都慶有

祭ル神四座　相殿（アイトノ）神四座

酒解（サカトケ）神　大若子（オホワカコ）神　小若子（ワカコ）神　酒解子（サカトケコ）神

社記并旧傳云件四社以孝謙帝天平勝宝元年

手中祭此地為帝基守護鎮守所謂酒解社
大山祇大若子社伊勢度遇神主遠祖加夫
良居命也小若子社同大若子房也酒解子
神木花開耶姫也其後人皇五十二代嵯峩
天皇后姫橘氏諱嘉智子父清友少而沉原
泊獵書記眉目如畫為人寛和風容絶異嵯
峩天皇初為親王納后寵遇日隆天王登祚
弘仁之始拜為夫人後立為皇后然常以魚
太子而凄凄不樂因茲皇后感神代幽契祈

酒解二座神矣一且感感点祖孕遂以當宮
清砂敷御座下居其日生兒所謂仁明天皇
是也天皇追神恵嘉祥手中以外祖父清友
并酒解社以檀林并酒解子神社又以瓊々
杵火々出見命配若子一社以為橘氏祖廟
也至今尊崇異他甚久祭祀無怠耳世人望
産月則必取當社砂佩帶然此遺風也　啓
○檀林皇后即嘉智子別名也清友贈太政
大臣正一位也諸兄之孫奈良麻呂之女也

○神系

●大山祇　伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智為三段其一段是為大山祇　日本紀

●大若子小若子　註二卷

●木花開耶姫　皇孫遊華海濱見一美人皇孫問云汝是誰之子耶對云妾大山祇神之子名吾田鹿芦津姫亦名木花開耶姫　下畧之　日本紀

●瓊々杵尊　傳伊勢外宮下記見り

●火々出見尊　瓊々杵尊子母大山祇神

妣吾田鹿芦津姫

○棋社　能野三所影向所

三石　市杵嶋社　幸神　護王社　楚石社

天王社

○御位　仁明天皇承和三年十一月被授酒解神從五位上大若子小若子神並從五位下　續日本紀

清和天皇貞観十七年五月十四日乙未梅

宮正四位上若子神小若子神酒解
子神並従三位　類聚国史
人皇八十代高倉院治十二年治承四年十
二月正一位　使橋氏五位一人　幣四前
○祭　梅宮神四座其祭料同平野祭
人皇五十六代清和帝貞観元年十一月十
日梅宮祭如恒　二十二社註式
陽成院御宇元慶三年四月三日停梅宮祭
三代実録

橘氏頃年同停祭今勅始而祭
第五十八代光孝天皇仁和元年四月七日
又始祭
第六十六代一条院永延以後祭不絶
同御宇治十九年寛弘二年十一月新作廟
頗如旧例念勅任祭自明年可用式日一条
院以来相續四月十一月上酉
○被定南方鎮守始　七十四代鳥羽院治
十年永久五年丁酉六月癸亥朔十八云

已上神社啓蒙

○神託　世人ノ無嗣シテ悲ミ又嗣生ン
トキ其母心安カラント思ハヾ常ニ我前ニ
シテ砂ヲ奉レ必其心ノ如ク成ベシ是ワガ
ヨクスル処也　倭論語

○大原野　乙訓郡　王城ヲ去テ三里計有
申酉ノ方　按ニ當国ニ同字之名所有愛
岩郡ニシテ王城北ニアルヲモ大原トイハリ但
多クハ大原ト唱ル也哥崇竜歴ヨリ詠ス

大原野の小倉の山の峯たちて
大原野の榊葉しげし神代の行あとをたづねん　貫之
右之哥大原野　小塩山此所ニマリ
祭ル神四座　祭良之春日社ニ同シ
神春日之下ニ見エタリ
旧記云人皇五十五代文徳帝仁壽元年ニ
月二日乙卯依大皇大后御祈ニ山城国葛野
郡大原野ニ宮柱廣知立春秋御祭如賜カ
ト部兼右神祇正宗云人皇五十四代仁明

帝御宇嘉祥三年為王城守護国院左府冬
副申沙汰勧請之　今存両説宜隨作説　啓蒙
○春日社遂於帝闕故移千大原野其山号小塩
蓋后妃夫人有参詣之便故也　神社考
○摂社
海童神社　瀬枡井水神
瀬和井　瀬加井　同　哥三讃り
和泉式部の せをはやみ　岩にせかるる　たきがわの　われても　すえに　あはんとぞ　思ふ
大和物語　夫木集　家集
○御佐　正一位　使藤原五位一人　幣
四前　宣命　黄紙
○祭　二月上卯日
人皇五十五代文徳天皇仁寿元年辛未二
月二日乙卯別勅大原野祭後二淮梅宴祭
国史　○近衛使同二于春日祭上卿并内侍
参向　神社考
○行幸始　六十六代一条院正暦四年十
一月二十七日

○后宮行啓之始

大原野行啓起ル五条后 順子 以テ藤氏勧学院衆為車副ト二条后 高子 以雙六乗車後ニ在五中將書テ和哥ヲ与フ二条后ニ 大原也小塩之山毛今日等巳曽神代之事緒思出良目 近衛

按ルニ此哥伊勢物語ニハ こともおもひ出らめ ト直シテ書リ

○吉田 愛宕郡 王城之東半里許ニ有

名にたてる吉田のさとの杖なれはつくともつきし君か代 拾遺 兼盛

[illegible] 玉葉 従三位 [illegible]

祭ル神 大原野ニ同 四座

○御堂関白御書ニ云奈良京時春日ノ社長岡京時大原野平安城之今吉田ノ社台帝都之冠尺有リ神祠之鎮護 啓蒙

○御堂関白道長公造リ法成寺ヲ崇テ吉田社ヲ以テ擬与福寺春日ノ社ニ云リ 神社考

○當社藤氏崇敬依テ異他ニ 是祖無延勧請ス 卜部兼倶説

○清和帝貞観年中鎮坐中納言山蔭卿
始奉渡之　月鯨右二十二社註

○摂社　八十四代順徳院建保三年四
月十三日入夜自伯大納言殿被御之吉田
内小神貞敕御名等可註進者以折紙註
申之二十二社註式

神樂岡社　當社地主雷火神
一言主社　今宮　幸川社　水屋社
水室社　楼本社　已上

○火雷神　火雷即丹塗矢之化神松尾明
神是也延喜式
卜部家説云神樂岡明神者雷神也号裂雷
神是吉田之地主也至一条院御宇卜部兼
延掌社務職時以藤氏之崇敬故勧諸春日
神上古日神居于天石窟諸神奏神樂其
処降為一山雷神擘開為二高野山如意嶽
是也其後事勝神鴨御祖神集會于此奏神
代之樂故云神樂岡此岡有八雷神之垂跡

八方堆土以祭之延喜式載霹靂神坐山
城国愛宕郡神樂岡西北者是也又此地有
日降坂以日神降臨故名之有池云龍沢造
斎場所大元宮安神代之美宝修宗源之神
道其東南有井其水自龍沢通一且沙落水
涸兼俱自以鋤浚之自龍出現眞景區也云
尓　神系円傳

○霹靂神祭三座坐山城国愛宕郡神樂岡
西北四月陰卜部一人吉日祭之十一月亦
同　延喜式

○位記　九十九代後光厳院延文五年六
月廿日正一位　使藤氏五位一人　幣四前
○祭　六十六代一条院永延元年十一
月廿五日甲申八幡宮始祭礼依誓願為
公家沙汰卜巳上廿二社註式
五月下子日十一月中申日吉田祭　簾中抄

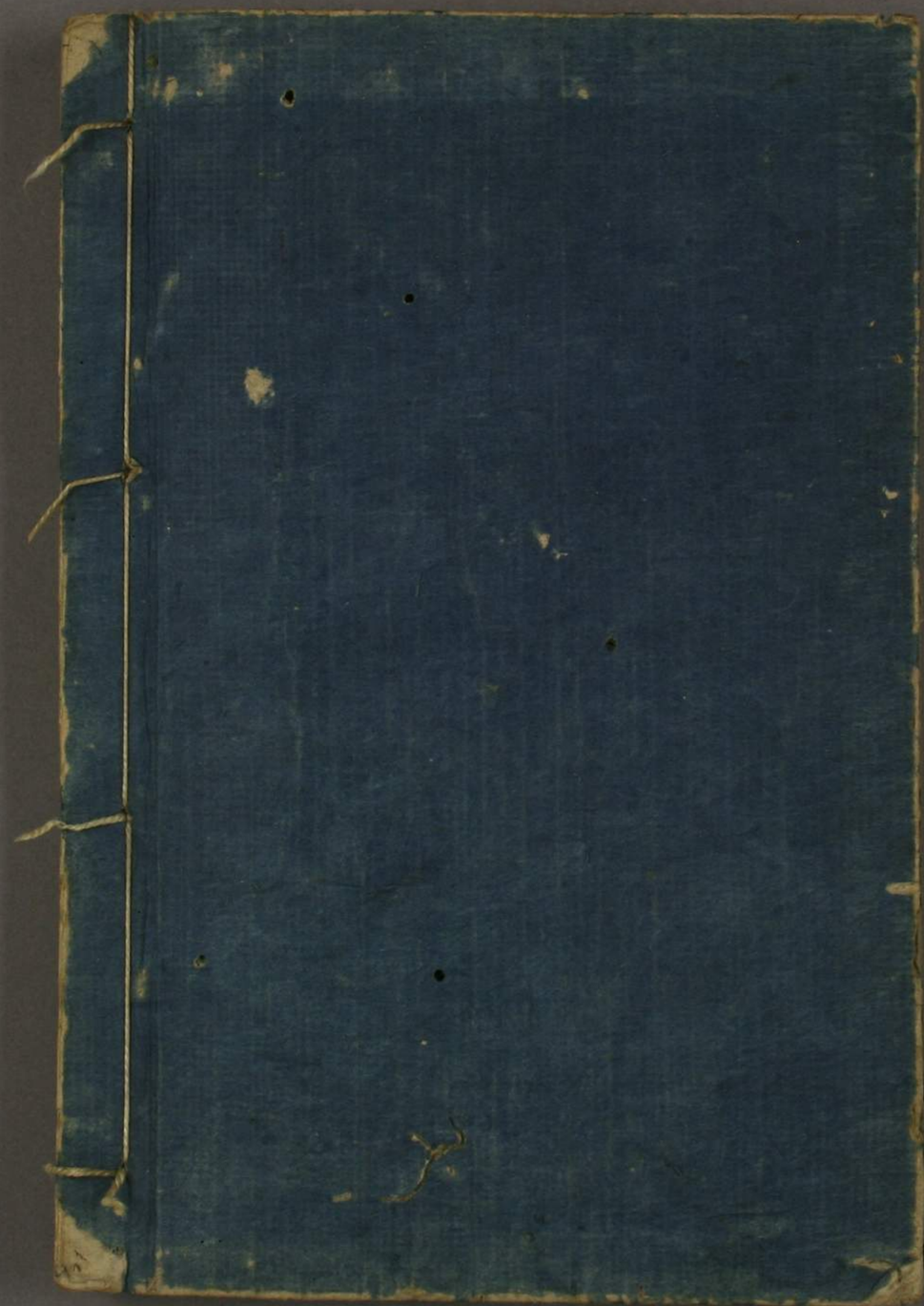
○大元殿　斎場所卜部家神道勧請所　是

額　日本最上日高日宮ノ　伊勢内外宮
ヲ始　八百万神勧請　云々

○鎮魂八神社　同所ニ有　往昔八帝都之
宮内省ニ有　秀吉公之時吉田山奉遷云々
按宮内省八太政官東大炊寮西ニアリ云々　拾芥抄

八神

高皇産霊尊　天御中主尊子　神皇産灵尊
高皇産尊子　魂留産灵尊　神皇実録曰元気精灵
生産魂尊　或云神皇産灵子　足産灵尊

道反魂神　○神皇実録云　天地主大巳貴神所化也
大宮売　事代主　事女神　御膳津神　豊受神
右八柱則八列守護験神八角灵命八心府
神坐故式為皇帝之鎮魂神矣温夫水気清
浄海水即大祖元神性也陽気有濁世生類
不清実孰也故清浄神気発則人魂陰気鎮
也故有鎮魂気也　神皇系図

日本風土記巻一